

初期万葉における定型化の問題

梶 川 信 行

一 序

『万葉集』に収録された歌々の多くが、本来声の歌であったとする見方は、すでに常識となつて久しい。確かに、題詞・左注に「誦」「吟」「唱」「口号」などと書かれたものを典型として、そこには声によつて披露されたと見なければならぬ歌が多い。⁽¹⁾したがつて、それが披露された場を復原しつつ、そこでどのような役割を担つた歌なのかということの解明に、多くの労力を費やしている注釈書も見られる。

しかし、それは『万葉集』という歌集に載せられた歌々に関する注釈ではあるまい。言うなれば、『万葉集』というテキストを素通りして、その向こう側にあつた（はずの）実態の把握に向かつているのであつて、筆者は、それ

をもつて『万葉集』の注釈とすることには、常々違和感を覚えてゐる。それは決して『万葉集』の注釈ではなく、そこに収録される前の個々の歌の姿に関する説明にほかなるまい。もちろん、そのような研究の必要性和有効性を否定するものではない。しかし、『万葉集』の注釈である以上、まずは歌集という形に結実した文字の歌として、それらを捉えるべきではないかと考えてゐる。

平成十九年度の秋季大会シンポジウムにおいては、音数律と字余りの問題がテーマとされたが、その議論を聞いてみると、『万葉集』の注釈と銘打ちながら、その注釈をしていない注釈書の姿と、似ているように思われてならなかつた。当日の会場における神野志隆光氏の発言にもあつたように、『万葉集』をその資料とする限り、それは『万葉集』というテキストの問題として論じられるべきものであ

ろ^②。そのことを不問に付したまま、音教律と字余りにつ

いて論じたところで、その実態を捉えたことにはなるまい。

『万葉集』は一般に、複雑な形成過程の中で、多様な資料を飲み込むことによって成立したと考えられている。大伴家から出たと見られる資料はもちろんのこと、人麻呂歌集や金村歌集などの私家集も、『万葉集』中にその原型がある程度留めているとする見方が有力である。だとすれば、『万葉集』は個々の資料の集合体である、ということになる。歌をどう表記するかということに関しても、一貫した方針がなかったということは、巻ごとに多様な表記がなされていることを見れば一目瞭然である。

しかも、そこに収録された原資料には、歌集である以上、何らかの選別意識が働いていたはずである。すなわち、資料ごとに異なった価値観によつて編纂された、ということが予想される。また、それぞれ異なる歴史認識に基づいて形成されたということも想像に難くない。とすれば、『万葉集』は多様な価値観と歴史認識が集積された歌集であるということになる^③。定型化のプロセスの問題に関しても『万葉集』の中には多様な考え方が共存していた、と見た方が適當ではないかと思われる。

本稿は、平成十九年度のシンポジウムを受けて、『万葉集』における定型化の問題を考えてみることを目的とする

が、それを古代のヤマトウタの実態として捉える立場には与しない。あくまでも、『万葉集』という歌集がそれをどのように捉えていたか、という問題として考えてみたいと思う。

二 歴史認識としての万葉史

『万葉集』巻一は、御代別の標によつて、各天皇の時代ごとに歌々が位置づけられている。文字によつて構成される歴史の中に、個々の歌を定位する形で編集されているのだ。また、そこに収録された歌々の題詞は、

天皇登香具山望国之時御製歌 (一・二)

天皇遊獨内野之時中皇命使間人連老献歌

(一・三〜四)

幸讚岐国安益郡之時軍王見山作歌 (一・五〜六)

というように、「……時……作歌」といった形が基本である。多くの場合、何をうたおうとした歌かということよりも、誰がどのような時に作った歌か、ということの方に心が向けられているのだ。確かにそれは、御代別の標を立てたことと矛盾しない形である。しかも、「右檢日本書紀無幸於讚岐国 亦軍王未詳也」(一・六左)などというように、作者や作歌事情について改めて検証しようとした左注も見られる。そこで『書紀』を用いていることも、巻一

が歴史化を志向していることを裏づけている。

公的な歌とされる「雑歌」が、歴史化される形で編纂されるのは、当然と言えば当然だが、巻二の「相聞」も同様の傾向を持つ。御代別の標の下に歌々が位置づけられていることは言うに及ばず、多くの題詞の記述は心情の説明に向けられたものではない。

天皇賜鏡王女御歌一首

(2・九一)

鏡王女奉和御歌一首

(2・九二)

内大臣藤原卿娉鏡王女時鏡王女贈内大臣歌一首

(2・九三)

内大臣藤原卿報贈鏡王女歌一首

(2・九四)

というように、誰と誰とが取り交わした歌かということが中心である。しかも、当事者同士が用いる二人称ではなく、「天皇」「鏡王女」「内大臣藤原卿」のように、律令に定められた称号・職名を含む社会的に通用する呼称が用いられているのだ。また、

大津皇子竊下於伊勢神宮上来時大伯皇女御作歌二首

(2・一〇五) (一〇六)

大津皇子竊婚石川女郎時津守連通占露其事皇子御作歌

一首 (2・一〇九)

のように、歴史的事件に関わる作歌事情が具体的に書かれた題詞も見られる。こうした題詞の形は、巻一と同様、御

代別の標が立てられたことと矛盾するものではない。

もちろん、中には心情の説明をした題詞も見られる。たとえば、

磐姫皇后思天皇御作歌四首

(2・八五) (八八)

である。「作者」思(人名)「歌」という形だが、この程度の説明ですら、「相聞」の題詞三四例のうち、わずか三例見られるに過ぎない。また、石川女郎と大伴田主の贈答 (2・一二六) (一二八) に、

大伴田主字曰仲郎 容姿佳艶風流秀絶 (中略) 明後女

郎既恥自媒之可愧 復恨心契之弗果 因作斯歌以贈諱

戲焉

(2・一二六左)

という形で、歌の読みを助ける左注も見られるが、こうした左注はこの歌群にのみ存在する。巻二編者の注ではなく、すでに原資料にあったものに違いあるまい。その当否は措くとしても、この左注は石川女郎と大伴田主の贈答を物語として伝えようとしていると見ることができ⁵⁾。言うなれば、それは紀伝的な歴史叙述と見做せるものであつて、これも歴史化の一つの形にほかなるまい。

「挽歌」にも御代別の標が立てられているが、その題詞も「……時……(作)歌」という形が基本である。「……後……(作)歌」「……年……(作)歌」も同類と見れば、全体の三分の二ほどがそうした形である。してみると、巻

一・巻二は総じて、それぞれの歌を歴史の一齣として定位しようとする形で編纂されていると見做すことができる。

また、巻三以後の多くの巻が、古い歌から新しい歌へと
いう配列であることも、周知の通りである。巻十七以後の
四巻も、家持の歌日誌と言われるように、作歌年次順の配
列が基本である。つまり、『万葉集』の多くの巻は、集め
た歌を時間軸の上に位置づけることによって成り立ってい
る。換言すれば、『万葉集』の編纂とは個々に存在した
歌々を歴史の形に再構成することが中心であった、と言っ
てよい。したがって、そこからヤマトウタの歴史を見据え
ることは、確かに可能であるように見える。

とは言え、そこに展開されているヤマトウタの歴史は、
平城京の一画で生まれた『万葉集』という、たった一つの
歌集が伝える断片的なものに過ぎない。しかも、たとえば
蒲生野の歌（1・20～21）のように、壬申の乱に勝利
した側の歴史認識に基づいて形成されたと見られる部分も
ある。『万葉集』の伝えるその歴史は決して、公平な立場
に基づくものではないのだ。とりわけ初期万葉の歌々は、
律令官僚制度の中核近くにあった人物による選別と位置づ
けを経たものであって、特定の価値観と歴史認識が紙の上
に具現化されたものと見なければならぬ。⁷⁾

周知のように、『万葉集』には大伴家の人々の歌が多い。

また、その編纂に大伴家の人々が関わっていたということ
も、従来から言われて来た通りであろう。しかし、そこに
登場するのは主に、長徳の子の御行、安麻呂の血を引く
人々であって、系譜の不明な池主と三中を別とすれば、長
徳の弟の馬来田、吹負の子孫が登場することは稀である。
その点からも、『万葉集』が特定の人々の歌々によって形
成された、偏った価値観と歴史認識に基づく書物であるとい
うことを窺い知ることができる。

それは、歌に詠まれた地名の分布を見ても明らかである。
もちろん、奈良の地名が多いのだが、「佐保」を中心に、
平城京左京の四条以北と外京、そしてその周辺の地名が圧
倒的多数を占めている。地名の分布にそうした偏りが見ら
れる最大の原因は、大伴氏の邸宅が、現在の奈良市法蓮町
にあったとされる佐保大納言家を中心に、いずれもその一
帯に存在したからであろう。その点から見れば、『万葉集』
は平城京左京の四条以北、とりわけ「佐保」を中心とした
歌集である、と見做すことができる。

このように、『万葉集』の編纂は歌々を歴史として定位
することが中心であったが、そこから窺えるヤマトウタの
歴史は決して、七、八世紀のその世界を過不足なく集約し
たものではない。たまたま文字によって掬い取られた歌々
が、『万葉集』という歌集の中で歴史化されたものの総体

であつて、それは紙の上の架空の世界であると言つてもよい。したがつて、その歴史は決して「古代和歌史」と呼べるようなものではあるまい。「万葉集」の編者の価値観と歴史認識を伝えるものという意味で、「万葉史」と呼んだ方がふさわしい。

三 初期万葉長歌の定型化

『万葉集』における音数律と字余りは主に、誦詠の問題として捉えられて来た¹⁰。そこでは訓字主体表記の歌も検討の対象とされて来たのだが、可能な限り忠実に音声¹¹が文字化されているという楽観的な見方をしたとしても、それを考えるための資料は一字一音式に書かれた歌に限定すべきであろう。たとえば巻十四には、一部訓字が混ざつてはいるが、それは概ね地名なので、音数の点ではまったく問題がない。しかし、それは都人の眼差して文字に定着した東歌であつて、東国の庶民の生の歌声ではあり得ない。当然その音数律も、都風に文字化されたものでしかあるまい。つまり、仮名書きの歌であつても、音声の実態を反映しているという保証はない、ということである。

一方、巻一・巻二のように、訓字主体表記の場合は、どんなに厳密に本文を検討したところで、訓みの揺れが生ずることは避けられない。したがつて、字余り句の総数は、

研究者によつて大きな差が見られる¹²。しかも、そもそも訓字主体表記とは、人麻呂歌集の略体歌が典型だが、音を伝えることよりも、意味を伝えることに力点を置いた表記にほかなるまい。換言すれば、訓字主体表記をする際に定型は所与のものとしてあつた、ということである。そして、膨大な数の字余り句が存在するということは、字余りもまた定型の範囲内であつた、ということになる。

また、57音を基本とした定型の確立は一般に七世紀のことだと考えられているが、初期万葉の歌々はとりわけ、歴史認識を伝えるものにはかならない。したがつて、七世紀の音数律と見えるものは、実は八世紀の人々が考えていた七世紀の姿なのだ。近年相次いで出土している歌木簡が、わずかにその実態を伝えてはいるが、現在確認されている七世紀の歌木簡は数点に過ぎない。しかも、それすら文字テキストでしかない。七世紀の音数律の実態を捉えることは、現状では非常に困難なことだと言わねばなるまい。

とは言ふものの、試みに『新編全集』を用いて、初期万葉に位置づけられた長歌の音数律のありようを見てみよう。筆者は『万葉集』中の「明日香浄御原宮御宇天皇代」以前に位置づけられた歌々の世界を初期万葉とする立場だが、巻一・巻二で言えば、それは「藤原宮」を現代とした近代以前のヤマトウタの歴史である。また、巻三以後の巻々で

言えば、概ね天平を現代とする近世以前のヤマトウタの世界である⁽¹⁵⁾と見做すことができる。いづれにせよ、初期万葉は人麻呂によって一つの到達点を迎えたヤマトウタの歴史の前身であり、『万葉集』という紙の上に創られた世界にほかならない。

まず、巻一卷頭の「泊瀬朝倉宮御宇天皇代」に位置づけられた天皇御製(1・1)である。それは、雄略天皇自身が直接娘子にうたい掛けた形であり、口誦の歌と見られていたのであるが、文字化されたそれは、

籠もよ み籠持ち 3・4

ふくしもよ みぶくし持ち 5・6

この岡に 菜摘ます児 5・5

家告らせ 名告らさね 5・5

そらみつ 大和の国は 4・7

おしなべて 我こそ居れ 5・6

しきなべて 我こそいませ 5・7

我こそば 告らめ 家をも名をも 5・3・7

という形である。もちろん、別のテキストを用いても、定型句以外はすべて字足らずで、5・7音の定型が確立していない時代の歌として記録されている、と見做せる点は同じである。雄略朝の長歌はたった一首しか存在しないが、それを巻頭に据えていることの意味は大きい。それはまさに、

その時代を象徴するものとして選ばれたに違いあるまい。したがって、巻一は雄略朝を定型の未発達な時代と捉えていたと考えることができる。

ところが、続く「高市岡本宮御宇天皇代」に置かれた舒明御製(1・2)は、

大和には 群山あれど 5・7

とりよるふ 天の香具山 5・7

登り立ち 国見をすれば 5・7

国原は 煙立ち立つ 5・7

海原は かまめ立ち立つ 5・7

うまし国ぞ あきづ島 大和の国は 6・5・7

となつてゐる。これも本来口誦の歌であり、言霊の発動を促す国土讚美の歌であるとする見方が通説だが、雄略御製と比べると、格段に定型化が進んだ形で文字化されている。また、同じく舒明朝の歌とされる中皇命の宇智野の歌(1・3)は、

やすみしし 我が大君の 5・7

朝には 取り撫でたまひ 5・7

夕には い寄り立たしし 5・7

みとらしの 梓の弓の 5・7

中弭の 音すなり 5・5

朝狩に 今立たすらし 5・7

夕狩に 今立たすらし 5・7

みとらしの 梓の弓の 5・7

中弭の 音すなり 5・5

という一首である。一般に、狩猟の場における呪術的な歌謡の伝統を色濃く受け継いだ口誦の歌だとされているが、これも57音の定型を基本とした形で記録されている。完全ではないものの、定型化が進んでいる点は、舒明御製と同じである。

さらには、軍王作歌(1・5)のように、定型化の完成度の非常に高い長歌も見られる。

霞立つ 長き春日を 5・7

暮れにける わづきも知らず 5・7

むら肝の 心を痛み 5・7

ぬえこ鳥 うらなけ居れば 5・7

……(中略)……

網の浦の 海人娘子らが 6・7

焼く塩の 思ひそ燃ゆる 我が下心 5・7・7

字余り句一句を含むものの、二九句から成る長歌は57音の定型でほぼ一貫し、577という形で結ばれている。

つまり、巻一における舒明朝は、雄略朝という古い時代とは違って、格段に定型化の進んだ時代として位置づけられている。舒明朝は奈良時代における近代の出発点であると

されるが、定型化の点から見ても、確かにそうした捉え方を裏づけているように見える。

とは言え、完成された「長歌」とはどのようなものかという点に関して、奈良時代にはまったく別の考え方もあった。それは『歌経標式』だが、「長歌」は「雅体」の一つであって、各句の「尾字」には韻を踏まなければならない、と言うのだ。しかも、『万葉集』と同じく、57音の繰り返しを基本とするものの、その例歌の一つは5777という結びである。この基準を前提にすれば、韻を踏まらず、結びの形式も異なる『万葉集』のそれは「雅体」の一つとしての「長歌」ではない、ということになる。もちろん、とうてい実態に即したものであったとは言えないが、『万葉集』に見られる定型化の歴史はやはり『万葉史』にほかならない、ということであろう。

ともあれ、試みに、巻一・巻二の人麻呂以前の長歌について、奇数番目の句は5音、偶数番目の句は7音、結句は7音のものを定型句として、総句数のうちの何パーセントが定型句であるかを、同じく『新編全集』¹⁸⁾で調べてみると、その定型率は以下のようなになる。

なお、定型句以外の句の中には、字余り句ばかりでなく、字足らず句も含まれる。また、「或云」「一云」等の異伝は便宜上、ここでは問題にしない。

雄略天皇	(1・1)	9	17	53%
舒明天皇	(1・2)	11	13	85%
中皇命	(1・3)	16	18	89%
軍王	(1・5)	28	29	97%
中大兄皇子	(1・13)	10	11	91%
額田王	(1・16)	15	18	83%
額田王	(1・17)	10	15	67%
婦人	(2・15)	13	13	100%
大后	(2・15)	9	13	69%
額田王	(2・15)	9	15	60%
天武天皇	(1・25)	10	13	77%
天武天皇	(1・26)	8	13	62%
大后	(2・15)	21	21	100%
古歌集中出	(2・16)	12	20	60%
柿本人麻呂	(1・29)	37	37	100%
柿本人麻呂	(1・36)	25	27	93%
柿本人麻呂	(1・38)	28	31	90%
柿本人麻呂	(1・45)	22	25	88%
藤原宮役民	(1・50)	42	47	89%
作者未詳	(1・52)	35	43	81%
柿本人麻呂	(2・13)	37	39	95%
柿本人麻呂	(2・15)	38	39	97%

柿本人麻呂 (2・138)	41	43	95%
柿本人麻呂 (2・167)	60	65	92%
柿本人麻呂 (2・194)	27	29	93%
柿本人麻呂 (2・196)	70	75	93%
柿本人麻呂 (2・199)	135	149	91%
置始東人 (2・204)	8	16	50%
柿本人麻呂 (2・207)	51	53	96%
柿本人麻呂 (2・210)	50	55	91%
柿本人麻呂 (2・213)	50	55	91%
柿本人麻呂 (2・217)	29	34	85%
柿本人麻呂 (2・220)	41	45	91%

雄略御製に対して、舒明朝の長歌の定型率は格段に高い。しかし、右肩上がりに定型化が進むかと言えば、必ずしもそうではない。初期万葉の長歌は六〇〜一〇〇パーセントまで、かなりの幅がある。ところが、持統朝になると定型率が高く、しかもバラつきも少なくなる。人麻呂の歌に限れば、ほとんどが九〇パーセントを超えている。これを見ると、定型率が高くなることが定型化の進行を表しているということがわかる。

しかし、それが一〇〇パーセントになることが長歌の定型化の完成した姿ではない、ということも見て取ることが

できる。持統朝の長歌の場合、字足らず句は「やすみしし吾が大王 高照らす 日の皇子」(1・四五)のごとき伝統的な常套句に多く見られるが、字足らず句を意図的に使用することが、古式に則った厳かな表現と見做されていたのであろう。とりわけ儀礼的な長歌では、そうした不定型句を適宜使用しているものこそ完成度の高い長歌である、と考えられていたと見てよい。「歌経標式」の「長歌」観とは異なるが、巻一・巻二における「明日香浄御原宮天皇代」以前はやはり、定型化が完成に向かう過渡期にあったと捉えられていたと見ることができよう。

因みに、長歌の不定型句は字足らずが圧倒的多数を占める。右に挙げた初期万葉の長歌の総句数は二一四句だが、そのうち字余り句が一一例(五・一%)なのに対して、字足らず句は三七例(一七・三%)。一方、持統朝の長歌の総句数は八三七句、字余り二六例(三・一%)に対して、字足らずは五四例(六・五%)。不定型句の減少の割合は、字余り句が二・〇ポイントであるのに対して、字足らず句は一〇・八ポイント。すなわち、不定型から定型への道程は、字足らず句が大幅に減少することであったと見做すことができる。

四 初期万葉長歌の結びの形式

周知のように、初期万葉の長歌にはしばしば、537という形の結びを持つものが見られ、つとに、それは古い結びの様式であったとの指摘がなされている^⑨。また、初期万葉の時代に現れた定型化への過渡的な姿であるとも論じられて来たが、いずれにせよ、不定型から定型へといった進歩史観的な見取り図の中における捉え方であると言つてよい。しかし『万葉集』は、天智朝以前に見られる古い形式として、537という結びもあったということを伝えているに過ぎない。

…… 我こそば 告らめ 家をも名をも (1・1)
 …… うつせみも 妻を 争ふらしき (1・1三)
 …… 心なく 雲の 隠さふべしや (1・一七)
 …… 若草の 夫の 思ふ鳥立つ (2・一五三)
 …… うらぐはし 山そ 泣く子守る山 (13・三二二二)
 …… あたらしき 君が 老ゆらく惜しも (13・三二四七)
 …… あたらしき 山の 荒れまく惜しも (13・三三三二)

という七つの事例が『万葉集』に見られ、記紀歌謡にも、

允恭天皇の時代に、

…… 波佐の山の 鳩の 下泣きに泣く

(記八三・紀七一)

という用例がある。事實はどうであれ、『万葉集』は、雄略朝といった非常に古い時代にすでに見られたこの形式が、斉明・天智という各天皇の時代にまで受け継がれた、ということ伝えてある。また巻十三の長歌は、周知のように、かつては古歌謡と見做されていたが、近年では、古体性を維持しつつも、後期万葉の文学的な営為の中で再構成されたものであるとする見方が通説である。しかし、反歌を持たない右の三首は古い様式である、と見做されていたと考えてよい。さらに、記紀もこの様式の古さを伝えているのだ。

ところが、537の結びの形式を初期万葉の時代の過渡的な姿だと考えると、極端に古い雄略御製が存在することは、不都合であろう。允恭朝に置かれた記紀歌謡の用例も、扱いに困ることになる。記紀をはじめとする古代の文献は、それぞれ異なる歴史認識に基づいて形成されたものだと見るべきだが、立場の異なる三つの文献が、揃ってその形式を極めて古いものと認定していることも、説明がつかない。

雄略御製にそうした結びの形式が見られるということは、

『万葉集』はそれを七世紀に特有の過渡的な形式だとは見ていなかったということに違いあるまい。また、増補と追補の過程を経て、その形式を持つ雄略御製が巻一の巻頭に置かれ続けたということは、それは決して一人の判断ではなかった、ということをも示している。巻一原撰部の判断を、増補者も追補者も、そして巻二の編者も、追認したのである。換言すれば、たとえ実際に537という結びの形式が七世紀の過渡的な姿であったとしても、記紀も『万葉集』もそうは見えていなかった、ということである。事實はどうであれ、『万葉集』はこの結びの形式を、雄略朝から伝えられて来た古朴なスタイルだと捉えていたのである。

五 初期万葉の短歌

そもそも、『万葉集』において「短歌」とはいったい何だったのか。

一四〇を超える用例のほとんどは、「……(作)歌〇首并短歌」という形で長歌の題詞に見える。いわゆる頭書の「短歌」の例をも含め、長歌に添えられた575777という音数を基本とした歌をそう呼んでいる。一方、長歌と無関係に作られた五句体の歌を「短歌」と呼んだ例は、家持に二例見られるに過ぎない。年代的に見ると、「并短歌」

の例は人麻呂以後にしか見られないが、卷一の長歌の題詞にはなく、卷二・卷三の長歌には一貫して見られる。つまり、それは卷二・卷三の編纂過程の中で加えられたものであった可能性が高い。すなわち、『万葉集』の編者たちは初期万葉の世界に「短歌」という用語の存在を想定していなかった、ということになる。

また初期万葉には、57577という形式の歌を「反歌」と呼んだ例はあるが、それを「短歌」と呼んだ例はない。膨大な字余り句の存在をも考慮に入れると、「短歌」という名称は単に、長歌に比べて短い歌というほどの意であったと見るべきではないか。『万葉集』においては、音数の規範はそれほど強固なものではなかった、ということであろう。

『歌経標式』には、「雅体」の一つの「短歌」は575777という五句から成るということが、一字一音式で、句ごとに表記されることによって、明確に示されている。奈良時代の末期には確かに、現代の私たちと同じように「短歌₁₁57577」という等式が成り立っていたのだ。しかし、それはあくまでも『歌経標式』の認識であって、『万葉集』の問題ではない。

そもそも、訓字主体表記の初期万葉の音数律とは、現代の私たちが指を折って数えるような、厳密なものだったの

ではあるまい。おそらく、言葉のリズムを感覚的に捉えるところになったものであろう。書かれたものをへヨムこと⁽²⁷⁾が音数律定型を成り立たせたとする説も説得力を持つが、その場合でも、音数は感覚的に把握されていた、ということであろう。常識論に過ぎないが、厳密に音数を数えつつ作歌することが定着していたならば、これほどたくさん⁽²⁸⁾の字余り句が存在することはなかったらうと思われる。

たとえば、卷十五の遣新羅使歌群の短歌には五五例（総句数の八・一％）、宅守・娘子の贈答歌群には二四例（同七・六％）の字余り句が見られる。これも『新編全集』のデータだが、歌数で言えば、四八首（三五・三％）と二一首（三三・三％）。ほぼ三分の一の歌が完全な定型ではない。音数律は一字一音式に書き、リズムを可視化することによってより鮮明に意識された⁽²⁹⁾と言うが、卷十五の傾向はむしろ、一字一音式に表記しても音数の揺れはあまり意識されなかった、と理解した方がよい。とすれば、それは単に「短句+長句」の形式⁽³⁰⁾だった、ということではないか。字余り・字足らずをも含めて、ゆるやかな規範として「短歌」という形式が存在した、ということであろう。「古代の和歌にあつて、字余りが避けられるような動きはなかった⁽³¹⁾」とも言われるが、字余り句や字足らず句があることで不定型と見做されることもなかった、ということに

違いあるまい。

さて、巻一における短歌定型の嚆矢は「反歌」である。

たまきはる 宇智の大野に 馬並めて 朝踏ますらむ

その草深野

(一・四)

山越しの 風を時じみ 寝る夜落ちず 家なる妹を

かけて偲ひつ

(一・六)

という舒明朝の歌々だが、どちらも字余り・字足らずのない完全な短歌定型である。とは言え、長歌の表現との連続性と共通性については、大きな違いが見られる。前者には、

長歌の表現と一致する句がなく、しかも、繰り返しうたわれたと見られる呪術的な長歌に対して、「反歌」には地名と時間がうたい込まれており、一回的な創作歌だと見なければならぬ²⁸。一方後者は、長歌の表現との連続性と共通性が高く、「反歌」を含めて統一的な主題をうたっている²⁹と見做すことができる。巻一の編者にとっては、どのような形であれ、長歌に添えられた五句体の歌は「反歌」だった、ということであろう。また、長歌に添えられた短歌体の歌に字余りは見られるものの、字足らずはない。その点からすれば、「反歌」には定型化への歴史がなかった、ということにもなる。

一方、独立の短歌は、

秋の野の み草刈り葺き 宿れりし 宇治のみやこの

仮廬し思ほゆ

(一・七)

といった額田王の歌を嚆矢とする。周知のように、これを代作と見る説もあるが、『万葉集』には「額田王歌」と明記されている。代作説は、「類聚歌林」の記述を引用した左注を視野に入れなければ生まれ得なかったが、巻一原撰部の編者はそれを「額田王歌」として位置づけ、複雑な形成過程を経ても、その形が残されている。『万葉集』の最終的な判断は、これは額田王の歌である、ということだったと考えてよい。

カリホシオモホユという字余りの結句には異説も見られ、カリイホシオモホユと九音に訓む説もある。しかし、多少の本文の揺れはあるにしても、これが短歌定型であることは疑いようがない。いずれの形であるにせよ、『万葉集』の短歌は最初から字余りを含む定型として出発しているのだ。

定型の短歌が「反歌」から始まることや、短歌がその初発から定型であることを、史実に違う、と見る向きもあるかも知れない。しかし、巻一の本文がそうした形であることは否定のしようがない。すなわち、雄略御製に続いて舒明朝の歌を置き、その時代の歌の代表として右に見た歌々を選ばれたのは、編者の価値観と歴史認識に適った姿だったのであろう。それはあたかも、雄略が古代を代表する天

皇と見做されていたからこそ、その御製が巻頭に置かれたのと同じである。中皇命の歌の「反歌」から短歌の歴史が始まっているのも、独立の短歌の始発が額田王であるのも、それ以前に57577という形式が存在したか否かということとは別として、それが編者の歴史認識であり、記録すべきヤマトウタの歴史であった、ということにほかなるまい。ところが、巻二の短歌の歴史は様相が異なっている。巻頭には、舒明朝を三百年ほど溯る「磐姫皇后思天皇御作歌四首」が載せられているのだ。「相聞」における短歌の歴史は非常に古かった、ということになるが、

君が行き 日長くなりぬ 山尋ね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ (2・八五)

かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の 岩根しまきて 死なましものを (2・八六)

ありつつも 君をば待たむ うちなびく 我が黒髪に霜の置くまでに (2・八七)

秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 いつへの方に 我が恋止まむ (2・八八)

という歌々である。傍線部に字余りが見られるものの、いずれも間違はなく短歌定型である。しかも、この「四首」が起承転結的な構成を持つということもよく知られている。歌である以上、音数が意識されていることはもちろんだが、

訓字主体表記によつて、心情の展開を伝えることこそが、この「四首」にとつてもっとも重要な目的であった、ということであろう。

題詞に歌数を記すか、記さないかという点からも窺えるように、巻一と巻二には、編纂方針を異にする部分がある。その歴史認識にも、違いがあったということが予想される。「雑歌」においては、舒明朝に初めて現われた短歌定型が、「相聞」においてはすでに、仁徳朝という古い時代から存在した、といった形である。ところが、『万葉集』の最終的な編者は、両者の違いを不自然に感じていなかったであろう。つまり、長歌の定型化とは違って、短歌の歴史は非常に古く、しかも「相聞」の短歌が「雑歌」に先行するという歴史を『万葉集』は最終的な形として伝えている、と見ることができると見る。それに對して、「挽歌」の歴史は浅い。巻二では、「近江

大津宮御宇天皇代」の、

岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば またかへり見む (2・一四二)

家にあれば 筥に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る (2・一四三)

という有間皇子の歌から始まる。「家にあれば」が字余りだが、「挽歌」もほぼ定型化された短歌から出発している。

卷三を含めても、

家ならば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥やせる この
旅人あはれ (3・四一五)

という聖徳太子の歌がもつとも古い。結句は字余りであり、初句もイヘニアレバと字余りに訓む説があるが、当然、これも定型の範囲内であったと考えてよい。

卷二と卷三とは歴史の起点に違いが見られるものの、どちらの巻も、「挽歌」における短歌は最初から定型であった、ということも伝えている。その嚆矢は聖徳太子だが、伝えられるべき「挽歌」の歴史はそれ以前にはなかった、ということかも知れない。

六 結

繰り返し述べたように、初期万葉は紙の上に示された『万葉集』の編者の歴史認識にほかならない。しかも、それは意味を中心として記録することを志向した訓字主体表記によって残されている。そこから七世紀の音数律の実態を究明することは、非常に困難なことである。むしろ、現状では不可能に近い、と言った方がよい。

そうした本稿の立場から言えることは、『万葉集』は長歌に関するのみ不定型から定型へといった歴史を想定していた、ということである。そして、57音を反復して行く

定型が確立する過程が初期万葉であった、と見做すことができる。また『万葉集』は、5377という形の結びを、雄略朝から受け継がれて来た古い形式だと考えていたが、それが七世紀以前のヤマトウタの歴史の実態を反映したものであったかどうかは不明である、と言うしかない。

一方、短歌に関して『万葉集』は、仁徳朝という非常に古い時代から詠まれて来た、ということも伝えている。周知のように、記紀歌謡はさらに古く、スサノヲの、

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみ(め)に 八重垣作る
その八重垣を (記一・紀一)

という歌を、57577という形の歌の始原としている。『古今和歌集』の仮名序もそれを「三十文字あまり一文字」の始めとしているが、短歌の起源をごく古いものとする見方は、八世紀においても、決して例外的な歴史認識ではなかったというを示している。それはゆるやかな定型として受け継がれて来たものであって、字余りは不定型ではない、ということであろう。もちろん、記紀と『万葉集』は異なる歴史を伝えているのだが、短歌が最初から定型であったという点では同じである。つまり、『万葉集』の短歌に不定型の時代は存在しなかった、ということにほかなるまい。

注

- (1) 久米常民「萬葉集の誦詠歌について——萬葉集の新しい理解のための序章——」(『萬葉集の誦詠歌』塙書房・昭36)。
- (2) その発言の趣旨は、「漢字テキストとしての古事記」(東京大学出版会・平19)、「複数の「古代」(講談社・平19)といった同氏の最近の著作にも、明確に示されている。
- (3) 拙稿「『初期万葉』の『挽歌』」(『語文』115・116輯・平15)、同「『初期万葉』の『相聞』」(『日本大学文理学部人文科学研究所紀要』67号・平16)、同「『初期万葉』の『雑歌』」(梶川信行編「初期万葉論」笠間書院・平19)など。
- (4) 拙稿「歴史認識としての初期万葉——『抒情詩』誕生の問題——」(『国語と国文学』84巻11号・平19)。
- (5) たとえば、武田祐吉『増訂萬葉集全註釋三』(角川書店・昭31)は「作り物語」と呼び、藏中進「石川女郎・大伴田主贈報歌」(伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ第二集』有斐閣・昭52)、伊藤博『萬葉集釋注一』(中央公論社・平7)などは「歌語り」という語で捉えている。
- (6) 拙稿「大友皇子の伝承と粟津——額田王論のために——」(『上代文学論究(中京大学)』3号・平7)、同「天武と大友——蒲生野の歌の形成過程をめぐって——」(『上代文学』74号・平7)。
- (7) 拙稿「『天平万葉』とは何か」(梶川信行・東茂美編「天平万葉論」翰林書房・平15)、同「『初期万葉』の世界——その歴史認識を考える——」(高岡市万葉歴史館編「額田王(高岡市万葉歴史館叢書18)」平18)など。
- (8) 犬養孝『万葉の旅(上)』(社会思想社・昭39)の「万葉全地名の解説」による。
- (9) 川口常孝「大伴諸宅」(『大伴家持』桜楓社・昭51)。
- (10) 毛利正守「古代日本の音節構造の把握に向けて」(佐藤武義編『万葉集の世界とその展開』白帝社・平9)、山口佳紀「『万葉集』の字余りから見た短歌の唱詠法」(『論集上代文学』第二十八冊)笠間書院・平18)、西條勉「字余りを許容する定型とは、どのようなものか?」(『上代文学会シンポジウム資料』2007、11、10 於日本女子大学)など。
- (11) 佐竹昭広「萬葉集短歌字餘考」(『文学』14巻5号・昭21)、毛利正守「萬葉集に於ける単語連続と単語結合体」(『萬葉』100号・昭54)など。
- (12) 佐竹昭広「萬葉集短歌字餘考」(先掲)は、『万葉集』の短歌における字余り句は総計一五六一句とするが、毛利正守「萬葉集に於ける単語連続と単語結合体」(先掲)は一七一七句、村田右富実「万葉集研究におけるコンピュータ利用の一側面——万葉短歌の字余りを中心に——」(『文学・語学』111・平13)は一八〇八句、佐野宏「萬葉集の字余りと脱落想定表記」(『萬葉』193号・平17)は一六八四句であるとしている。
- (13) 注7に同じ。

- (14) 拙稿『初期万葉』の世界——その歴史認識を考える——(先掲)など。
- (15) 拙稿『天平万葉』とは何か(先掲)。
- (16) この歌の研究史については、菊川恵三「中皇命と宇智野遊狚の歌」(神野志隆光・坂本信幸編『セミナー万葉集の歌人と作品 第一巻』和泉書院・平11)に尽されている。
- (17) 伊藤博「古事記における時代区分の認識」(『萬葉集の構造と成立 上』稿書房・昭49)。
- (18) 「定型率」という用語は、西條勉「記紀歌謡と定型・統」(『専修国文』81号・平19)が使用している。
- (19) 鹿持雅澄『永言格』。近代においては、松岡静雄「五三七調」(『文学』1巻6号・昭8)など。
- (20) 駒木敏「五三七結解型長歌の形成」(『日本古代論集』笠間書院・昭55)。また、太田善麿「和歌における定型の成立」(『古代日本文学思潮論IV』桜楓社・昭41)も「天智天皇の御代のころを中心」とした時代の様式としている。
- (21) 西郷信綱「抒情詩の発生」(『日本古代文学史』岩波書店・昭38)、駒木敏「万葉集の歌体」(『万葉集1(和歌文学講座2)』勉誠社・平4)、毛利正守「万葉にみる音節構造」(『国文学 解釈と鑑賞』62巻8号・平9)、多田元「五七調の成り立ちへの試論」(『古代文学』42号・平15)などに見られ、通説であると言ってよい。
- (22) たとえば、遠藤宏「長歌考——万葉後期の成立と思われものについて——」(『古代和歌の基層 万葉集作者未詳歌論序説』笠間書院・平3)がその典型である。
- (23) 神野志隆光「複数の「古代」(講談社・平19)。
- (24) 西條勉「定型と文字の間」(西條勉編『書くことの文学』笠間書院・平13)、同「和歌起源論の可能性——諸説の検討を通して——」(『高岡市万葉歴史館紀要』13号・平15)。
- (25) 西條勉「和歌起源論の可能性——諸説の検討を通して——」(先掲)。
- (26) 西條勉「記紀歌謡と定型・統」(先掲)。
- (27) 毛利正守「古代の音韻現象——字余りと母音脱落を中心に——」(『日本語研究会編『日本語史研究の課題』武蔵野書院・平13)。
- (28) 拙稿「『初期万葉』の新体詩」(『語文』山輯・平14)。
- (29) 拙稿「『初期万葉』の『反歌』」(『語文』103輯・平11)。
- (30) 伊藤博「代作の問題」(『萬葉集の歌人と作品 上』稿書房・昭50)。
- (31) 伊藤博「巻一雄略御製の場合」(『萬葉集の構造と成立 上』稿書房・昭49)、岸俊男「画期としての雄略朝」(『日本政治社会史研究 上』稿書房・昭59)など。
- (32) 山田孝雄「萬葉集講義 巻第二」(宝文館出版・昭7)。